

株式会社サニカ「CL600」

自転車駐車場工業会 サイクルラック技術基準

「新基準 強度区分Ⅳ」への移行を達成

自転車駐車場の安全・安心に資する取り組みとして、一般社団法人 自転車駐車場工業会では、独自に「サイクルラック技術基準」を定め、これに基づく認定制度を設けている。本誌でも何度か触れている通り、同基準は2023年には大幅な改定が行われ、設置場所（屋内／屋外、設置階）に耐地震力・耐風圧力を組み合わせた4段階の「強度区分」が新設された。今般、すでに従来基準で「認定」を取得していた製品が、改めて新基準での「認定」を、しかも最も厳しい「強度区分Ⅳ」で取得したという。

今回、従来のサイクルラック技術基準で認定を取得していながら、新基準でも改めて認定取得を達成したのが、株式会社サニカ（山梨県南アルプス市）の個別ロック式サイクルラック「CL600」だ。タイヤを受け入れるレールの角度は緩やかで、さらにその入口部分はテーパ状に広く取られ、使いやすさを追求。また、センサーにより作動するモーター式ロック機構を搭載することで、静粛性と確実なロックを両立させるなど、発売以来、高い評価を得ている。

そのCL600が新基準「強度区分Ⅳ」の認定取得にあたって製品に手を加えた点はないという。振り返ると、同製品が発売されたのは2019年で、発売以降い

くつかの改良を施した後、改定前のサイクルラック技術基準の認定を取得したのが2021年のことだった。同社としては初の認定取得だったが、このときも、タイヤを保持するU字状の金属アームの塗装を変更した程度で審査をクリアしている。そして今般、より厳しくなった新基準の「強度区分Ⅳ」も「変更なし」で認定取得を達成しているのだから、同製品がどれだけ高い強度が与えられていたのかがうかがえる。

サイクルラック技術基準はラックの形状・種類ごとに分けられていて、その中



2021年7月に行われた、従来基準での「CL600」の実地・現物審査の様子。製品仕様に変更がないことから、今回の新基準での認定は書類審査のみが行われ、現物審査は「パス」。



自転車ロック装置 CL600

ロックユニット：モーター式タイヤロック機構

収納可能自転車	本機の実力値	認定機の規格
タイヤサイズ	16～28インチ	20～27インチ
タイヤ幅	63mm以下	32～54mm
質量	35kg以下	28kg以下

■ サイクルラック技術基準「強度区分」

強度区分	想定設置場所	自然外力（重力以外）
I	屋内（地下階～1階）	地震力
II	屋内（地下階～3階）	地震力
III	屋外（地面）	地震力、風圧力
IV	屋外（地上10m高まで）	地震力、風圧力

自転車駐車場工業会が2023年に改定したサイクルラック技術基準により新たに設けられた4段階の「強度区分」

には「上段昇降式ラック」のように複雑な可動機構があるため強度の確保が難しい機種もある。CL600はその中で唯一、ラック自体に可動部を持たない「平面・固定式」に分類され、強度確保がしやすいと捉えることもできる。とはいえ、「仕様変更せずに『強度区分Ⅳ』達成」は明らかに別のレベルの話だ。

サニカ独自の「開発基準」

サイクルラック技術基準の改定で新たに設けられた「強度区分」の基準となっているのは「地震」や「風圧」だが、サニカが製品開発時に重視しているのは「使いやすく良好な状態を、長く維持できること」だという。それは「利用者が安心して使い続けられること」であり、「施工もメンテナンスもしやすいこと」でもあ



子乗せ自転車や三輪自転車なども駐輪しやすいよう低ラックのみを配置。架台の間隔も設置環境に合わせて選択可能だ。



こちらは高・低ラックが交互に並べられた仕様が設置された事例。狭い間隔でも様々なタイプの自転車が駐輪している様子がわかる。



ラックを固定する横方向の架台は奥側の1本のみで、設置面に覆いたくないものがある場所での設置の自由度を高めている。



静粛性に優れるモーター式を採用したロック機構。センサーを搭載し、車両の有無を見分けてロック機構の開閉を制御する。

る。そのスタンスのもとで完成させた製品が、結果として、地震や風圧を想定して設定された新技術基準「強度区分Ⅳ」をもクリアすることとなった。

ではここで、「CL600」の特長に注目してみよう。タイヤ幅63mmまで対応する一方で、小径タイヤも安定して確保する工夫が施され、16～28インチまで対応。また、同社のそれまでの同型ラックは個々のラックを固定する横方向のレール（架台）が前後に2本あったが、この「CL600」では奥側1本のみとなっている。これにより、これまでは例えば手

取材はサニカ東京支店（東京都千代田区）にて。ショールーム機能も有していて、「CL600」の実機がセットされ、自転車の出し入れ等を実際に確かめることができる。



株式会社サニカ（向かって左から）

東日本営業本部 東京支店 営業三課 副主事 長岡 晃氏
取締役 東日本営業本部 本部長 兼 東京支店 支店長 石田 滋氏
開発本部 開発部 機構技術課 課長 小林 司氏
東日本営業本部 販売管理部 販売管理課 副主事 森口 紘行氏

前側にマンホールや点検口などがあり設置が難しかった場所でも問題なく設置できるなど、汎用性を大幅に向上させている。また、使用するボルト・ナットのサイズを統一するなどして施工性を高めているという。ちなみに同社では製品開発の初期からメンテナンス部門の担当者が参画する体制を敷いているとのこと。

同社の製品は「価格設定が高め」との指摘もあるようだが、その一方で設置後、長く安定して使えること、維持管理がしやすいことまでを含めると、単純に「高い買い物」とはならないようだ。

設置済みの「CL600」も“同性能”

ここで改めて、従来基準の認定品であった「CL600」が、仕様を変更することなく新基準「強度区分Ⅳ」を取得した事実をよく考えてみたい。この事実が意

味するのは、すでに設置済みの、つまり設置当時は従来基準の認定品であった「CL600」も、新基準「強度区分Ⅳ」を達成していることに他ならない、ということだ。これは、設置済みの自転車駐車場の利用者や管理者にとって、大きな安心感につながるはずだ。

同社ではこの「CL600」の他にも、操作しやすい大型液晶タッチパネルを採用し、キャッシュレス決済にも対応する集中精算機「PCM1000」が高い評価を得ているが、さらにゲート式駐輪システムやバイクロックチェーン、バイクロックシステムなども広くラインナップし、自転車駐車場に必要な機器をトータルで揃えることが可能だという。「CL600」についてはもちろん、自転車駐車場への機器導入の検討の際には「まずはお気軽にお問い合わせを」とのこと。

PP